In the case taking ~Nu-form of action verbs : Naku, Warau and Emu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20412

動作動詞がヌ形をとる場合
―「泣く」「笑ふ」「ゑむ」―

近藤　明
橋本直美*

一　諸説の概観と本稿の立場

古代における助動詞ツ・ヌの使い分けについては、ツに上接する動詞とヌに上接する動詞との間に何らかの相違があるとの観点と、ツ・ヌ自体の意味の相違という観点から、古来種々の論が出されている。両者の観点は重なるところもあるが、ひとまずこの二つに大別して整理しよう。

論によっては対象とする時代が異なるが、その点は一旦措くことにする。

まず、動詞の相違に着目しての輪は、大体次のように分類できるだろう。

A　他動詞にはツがつき、自動詞にはヌがつく。（義門、[1] 宮田和一郎[2]等）

B　作為的・意志的動作を表す動詞にはツがつき、無意志的・自然推移的動作を表す動詞にはヌがつく。（松尾捨治郎、[3] 大野晋[4]等）

C　動作過程表現型動詞・状態過程表現型動詞にはツがつき、動作結果表現型動詞・状態帰結表現型動詞にはヌがつく。（井手至[5]）

D　動作動詞はツ形をとり、変化動詞はヌ形をとる。（鈴木泰[6]）

これらのうち、A説については、ツ・ヌの接続の傾向を大ざっぱに整理はできるが、例外的な接続をする用例や、共通の動詞にツ・ヌ両方がつくような用例を説明する手段が限られている。現代では自動詞であるものが古代には他動詞的な性格を持っていた（またはその逆）とか、慣用化していたといった方向で対応せざるを得ない。

B説の場合、A説よりも広く用例を処理できるようである。例えば同一の動詞にツ・ヌ両方がつくような場合も、文派上意志性の強い場合にはツが、無意志性・無作為性の強い場合にはヌがつくといった説明をすることができる。ただ、ツ・ヌを完了のアスペクトに関わる助動詞と見るならば、そのような語の使い分けがなぜアスペクトには直接関わりのない意志性・無意志性の差によって担われていたのかという疑問を起させる（この点は自他の差とするA説も同様だが）。

平成6年9月16日受理
*金沢大学教育学部平成5年度卒

C説・D説はどちらもアスペクトの観点からの動詞分類で、かなり広い範囲の用例をカバーできる説と思う。両説は内容的に重なる部分も多いが、奥田靖雄氏のアスペクト論[7]を取り入れた後発のD説の方が理論的に優れていると見られ、本稿では上接動詞の問題についてはD説に従うことにする。

次にツ・ヌの意味に関する説としては、次の二つを検討の対象としたい。

a　ツは動作の完了とともに動作の惹起する結果の観念を伴うものであり、ヌは動作の完了のみを表す。（小林好日）[8]

b　ツは動作の完了を、ヌは状態の発生を示す。（中西宇一）[9]

a説については、これと相反するような意見が一方で見られる。

（「つ」は）小林氏のいふやうに、結果を考へるよりも、むしろ前の動作が済んだ事をいって、之をつきはなすやうな意味が強いのではあるまいか。……動作が実現してはなれる意味、これが「つ」の特質ではあるまいか。[10]

つは現在に対する関係は極めて少なく……つは過去的であるから、事柄が其処で一段落を画して居て、次の事柄と因果的又は断続的関係を有する。ぬは自然的であるから、事柄がなだらかに運んで次の事に連続するやうな関係を有する。[11]

更に、b説もa説とは反対の方向をとるものと言える。

このような食い違いが出てくる原因のうち、a説の側に属するものとしては、本下正俊氏の指摘されるような点[12]――助詞テやテシカと見るべきものをツの用例の中に加えている――に加えて、上代の「つ」の中で最も多い「～かねつ」のとらえ方が挙げられる。「忘れかねつ」等の「～かねつ」は「忘れかねてある状態」をいうのであり、これは「つ」は完了とともに結果の観念を伴うからであるというのであるが、同意しがたい。[13]

b説はa説と比べて矛盾が少なく、広い範囲をカバーできるように思われ、本稿ではこれを支持する立場を取りたい。吉田茂晃氏はb説をほぼ認めた上で、

動詞にヌの下接した述語は「過程の始発」を表わし、動詞にツの下接した述語は「過程の終結」を表す。

と修正されたが、[14]妥当なことと思われる。

なおここまで先行研究に合わせるためもあって、「助動詞ツ・ヌの意味」といった言い方を主にしてきたが、以下鈴木泰氏らに倣って「動詞のツ形・ヌ形の意味」という言い方をすることにする。[15]また「ツ・ヌに上接する動詞」という言い方も「ツ形・ヌ形をとる動詞」という言い方に改める。

二　「泣く」「笑ふ」「ゑむ」の場合

ツ形をとる動詞・ヌ形をとる動詞の差については、本稿では前述のようにD説に従う立場をとるが、その観点からして例外と言える傾向を示す動詞がある。その中でここでは「泣く」「笑ふ」「ゑむ」を取り上げることにする。これらはいずれも感情が外形に現れた動作を表す動詞であるが、現代語においてはテイル形を取った場合「動きの最中」の意を表し典型的な主体運動動詞であると言える。従って一般的傾向からすればツ形をとることが予想される動詞であるが、実際には、ヌ形をとることが（特に中古において）圧倒的に多い。

これはA説の立場からしても例外的な傾向であり、その立場からの説明も試みられているが、本稿ではD説及びb説の立場からこれらの用例を説明することを試みてみる。

以下「泣く」「笑ふ」「ゑむ」がツ形・ヌ形をとるものの用例数

を示しつつ論を進めていくが、動詞とツ・ヌの間にル・ラル・ス・サス・シムを介するものは用例に加えない。動詞に接頭辞「うち」を伴った「うち泣きぬ」などは用例に含めることにする。使用資料は上代は万葉集、中古は蜻蛉日記、枕草子、源氏物語である。上代の資料としては記紀歌謡・宣命・祝詞等も調べ、中古の資料としては竹取物語、伊勢物語、提中納言物語も調べたが該当の用例がなかった。

【泣く】

	ツ形	ヌ形
上代	2	0
蜻蛉	0	4
枕草子	0	2
源氏	0	22

上代においては確実な万葉仮名表記の例としてはツ形のみが認められるが、[16]中古ではヌ形が優勢になっている。中古のヌ形の例をいくつか掲げよう。

①（下山をすすめる兼家の使者が帰った後）われならぬ人（侍女ら）は、ほとほどなきぬべく思ひたり。（蜻蛉　中　一四三⑧）

②（源氏が夕顔の死に）なきたまふさま、いとをかしげにらうたく、見たてまつる人（惟光）もいと悲しくて、おのれもよよとなきぬ。（源氏　夕顔　一二八②）

③駒なめてうち過ぎたまふにも心のみ動くに、（源氏の贈歌は）露ばかりなれど、いとあはれにかたじけなくおぼえて、（明石方らは）うちなきぬ。（源氏　濡標　五〇二⑭）

④（中の君は）いみじく念ずべかめれど、え忍びあへぬにや、今日はなきたまひぬ。（源氏　宿木　一七二五⑬）

①はまだ泣いてはいないのだが、今にも泣きだしそうな様子だということである。②では源氏は惟光が現れた時から泣いているのだが、惟光ははじめは泣いてはおらず、源氏の泣く様子を見ているうちに泣きだしたのである。③はこの場面で明石君らははじめから泣いていたのではなく、源氏の歌を受け取ってから泣きだしたのである。④は中の君が匂宮と六の君に嫉妬して泣く場面で、それまで我慢していたがこらえきれずにここで泣きだしたものと解される（この直後に「（涙が）こぼれそめては……」という語句もある）。なお④の例のように「え忍びあへで」「えたへで」の類の語句と共起する例が源氏に他に二例あるが、「今まで我慢していたのが我慢しきれずに泣きだした」という場面で「泣きぬ」が使われることと関係があるだろう。

以上の例に見られるように「泣く」のヌ形においては、単に「泣いた」というのでなく、今まで泣くいていなかったものが「泣きだした」と解されることが多く、b説のヌ形が過程の「始発」を表すという見方に適合する。

また「泣きだす」ことを、またこれを「泣いていない状態」から「泣いている状態」への変化という捉え方ができるならば、これらの「泣きぬ」は、「泣く」という主体動作の側面よりも、泣いていない状態から「泣く」状態への主体変化の側面に焦点があてられているということになりそうである。そうなると動詞とツ・ヌの接続に関するD説とも適合してくる。

なお前述のように、上代にはツ形の方が優勢であり、中古との間に時代的な相違があるように見える。[17]このような事実の存在については既に木下正俊氏にも指摘があり、氏はA説の立場からこの種の動詞は上代には他動詞的であったためと見られている。確かに上代のツ形を見ると「音を泣きつ」という形でヲ格をとって

いる。ただ本稿の立場からいうと上代のツ形は、

⑤……（処女墓の）故縁聞きて　知らねども　新喪のごとも音泣きつるかも（泣鶴鴨）（万葉　一八〇九）

⑥剣大刀見に添ふ妹をとりみがね音をぞ泣きつる（奈伎都流）手児にあらなくに（万葉　三四八五）

のいずれも、ヌ形に見られたような「泣きだす」という面が稀薄で、単に「泣く」過程の「完了・終結」を表したものと取られ、その点でヌ形との意味的な差を認めることはできる。

【笑ふ】

	ツ形	ヌ形
上代	0	0
蜻蛉	1	1
枕草子	0	4
源氏	0	7

蜻蛉にツ形が一例ある以外は全てヌ形である。まずヌ形の例を見てみる。

⑦恨みつる人々、怨じ心憂がりながら、藤侍従の一条の大路走りつる語るにぞ、みなわらひぬる。（枕「五月の御精進のほど」段　一一〇⑨）

⑧（頭中将が）ただいみじう怒れる気色にもてなして太刀を引き抜けば、女「あが君、あが君」と向かひて手を擦るに、ほとほどわらひぬべし。（源氏が頭中将の）太刀抜きたる腕（かひな）をいといたうつみたまへれば、ねたきものから、えたへでわらひぬ。（源氏　紅葉賀　一一五八⑬～一一五九⑤）

⑨「おほし垣本あるじ……はなはだをこなり」など（博士が）言ふに、人々みなほころびてわらひぬれば（源氏　少女　六七〇⑫）

⑦は一緒に行けずにそれまで「怨じ心憂が」ついていた人々が、話を聞いて笑いだしたところである。⑧は頭中将が源氏と源内典侍おどす場面で、「笑いをこらえていたのが笑いだしそうになった・笑いだした」ということである。⑨は文章博士たちに対してまじめに振るまおうとしていたが「こらえきれずに皆笑いだした」という場面である。

以上の例のように「笑ふ」のヌ形は、今まで笑わずにいたのが笑い出したということと解され、「泣く」の場合と同様に、D説およびb説に適合するものということになる。

なお「笑ふ」のツ形が蜻蛉日記に一例ある。

⑩（兼忠女の歌を見て）「旅かさなりたるぞあやしき」などもろともにもわらひてき。（蜻蛉　下　一七九⑥）

これはヌ形と比べて、「泣く」過程の「完了・終結」を主に表したものと取られ、その点でヌ形との意味的は認められよう。

【ゑむ】

	ツ形	ヌ形
上代	1	0
蜻蛉	0	0
枕草子	0	1
源氏	0	2

上代には一例のみながら「ゑみつ」というツ形があるのに対して、中古ではヌ形に偏っている。小松登美氏は、上代に「ゑむ」がツ形をとっているのに対して、「ゑむ」と意義的に近似した「笑ふ」が中古ではヌ形をとっていることを指摘されているが、[18] それにつけ加えれば「ゑむ」も中古ではヌ形をとるわけである。

四

⑪「ある事あらがふは、いとわびしうこそありけれ。ほとほとゑみぬべかりしにわびて、台盤の上にあやしき布のありしをただ取りに取りて、食ひまぎらはししかば（枕「里にまかでたるに」段　一八一⑫）

⑫尼君（源氏を）そぞきて見たてまつるに、老も忘れ、もの思ひもはるる心地してうちゑみぬ。（源氏　松風　五八九⑩）

⑪は「事実を否定してしまうのはとてもつらく、すんでの所でにやにやしだしそうだったのに困って」ということであり、⑫は源氏を見て急に心が晴れて笑い顔になりだしたのである。「ゑむ」のヌ形についても、単に「笑った」というのではなく、笑っていなかったのが「笑いだした・笑いだしそうになった」ということと解される。「ゑむ」のヌ形は数が少ないが、ほぼ「泣く」「笑ふ」の場合と同様のことが言えるかと思う。

なお上代のツ形は

⑬正月立つ春の初めにかくしつつ相しゑみてば（安比之恵美天婆）時じけめやも（万葉　四一三七）

というものであるが、ヌ形と違って過程の始発と言った意味は認められず、意味上違いがあると言える。

三　おわりに

以上「泣く」「笑ふ」「ゑむ」がヌ形をとった場合についての考察をまとめると次のようになる。

○これらの例は概ね「～しだす」という「過程の始発」を表すものと見ることができ、その点ではb説に適合する。

○これを「～していなかったものが～している状態になった」というように捉えると一種の主体変化を表すことになり、その点ではD説に適合する。

前者は結局b説の有効性の追認ということになる。後者のヌ形のあるものを一種の主体変化を表すもののように解することは古くから、例えば松尾捨治郎氏によって、

（「いひぬ」「しぬ」「恨みぬ」の類が）深く味へば　自然いふやうになった　然するやうになった　自然怨むやうになると見るべきであって

といった形でなされており、[19] これも目新しいことではない（松尾氏の論はB説を基本的立場としての論で、本稿と立場は異なるけれども）わけだが、これらの動詞がヌ形をとっている例を説明するのにb説、D説の立場が有効であることの確認は本稿によってなし得たかと思う。

ただ、以上のように考えたとしても、なぜこれらの動詞が中古においてほとんどツ形をとらずヌ形をとっていたのかという問題はいぜんとして残る。

これと関連することとして、これらの動詞が上代にはツ形をとり中古にはヌ形をとるという現象をどう把握・解釈するかという問題も残っている。木下氏や小松氏はこれを時代的な変化と見られているが、それぞれの用例を見ると、単にツ形・ヌ形それぞれの意味に応じた使い分けがなされた結果のようにも思われた。しかしそうだとしたら上代と中古の用例数の相違は単なる偶然の結果であるのか、表現法の相違といったことに基づくものであるのかという問題が残ることになり、現時点でははっきりした解答を用意することができない。これらの点は本稿にとって重要な課題であり、今後更に考察していきたい。

（注）

（1）『活語指南』（一八四四）
（2）「助動詞『つ』『ぬ』の論」（『平安文学研究』三〇　一九六三）
（3）『国語法論攷』（文学社　一九三六）
（4）「古文を教へる国語教師の対話」（『国語学』八　一九五二）他
（5）「古代日本語動詞の意味類型と助動詞ツ・ヌの使いわけ」（『国語国文』三五―五　一九六六）
（6）『古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の分析―』（ひつじ書房　一九九二）
（7）「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階―」（『ことばの研究・序説』むぎ書房　一九八五）
（8）「上代に於ける助動詞『ぬ』『つ』の本質」（『国語学の諸問題』岩波書店　一九四一）
（9）「発生と完了―『ぬ』と『つ』―」（『国語国文』二六―八　一九五七）
（10）橋本進吉「助動詞の研究」［一九三一講義案］（『助詞・助動詞の研究』岩波書店　一九六七）
（11）注（3）文献、p六九五～六九六
（12）「ツ・ヌの別とそれに関する訓釈」（『万葉集語法の研究』塙書房　一九七二）
（13）「～カヌ」がツ形をとる理由や、カヌとツの意味関係については、近藤の考えを「接尾語カヌの下接語の時代的変化―助動詞ツとの関係の衰退―」（『国語学』一五二　一九八八）に示した。
（14）「『完了の助動詞』考―万葉集のヌとツ―」（『万葉』一四一　一九九二）
（15）例えば現代語の「～テイル」にしても、それ時代で特定のアスペクト的意味を表すのではなく、各種の動詞と結びついた「動詞＋テイル」の形（テイル形）をとってはじめ言い方より、「テイル形の意味」という言い方の方が適切である。
（16）小路一光『万葉集助動詞の研究』（明治書院　一九八〇）では、万葉集二二六六歌の「可泣美」を日本古典文学大系に従って「泣きぬべみ」と訓んでいるが、「ぬ」の部分が仮名表記されていない。
（17）注（12）文献
（18）「古典解釈のための助動詞　つ・ぬ」（『国文学解釈と鑑賞』二二―一　一九五七）
（19）注（3）文献、p六九五

【使用資料】

万葉集（日本古典文学全集）　蜻蛉日記（改訂新版かげろふ日記総索引）　源氏物語（源氏物語大成）　枕草子（枕草子総索引）